

廃藩置県と図書館の成立：中津市立小幡記念図書館 の由来を中心に

伊東，達也
山口大学人文学部：講師

<https://doi.org/10.15017/6786340>

出版情報：教育基礎学研究. 20, pp.1-17, 2023-03-25. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：



廃藩置県と図書館の成立

— 中津市立小幡記念図書館の由来を中心に —

伊 東 達 也

問題の所在

本研究は、近世から近代への転換期に日本各地に設けられた図書館の実例に基づき、近代公共図書館の概念が受容される過程を確認して、図書館観をめぐる合意がいかにして民意の中に醸成されたかを解明することを目的としている。そして、これにより近代公共図書館の制度と思想が日本社会に位置づけられていく過程を構造的に示すことをめざす。

近世の読書施設との接続がうかがわれるおもな事例に、明治末期から大正期にかけて各地に設立された公立の図書館や、その前身となった読書施設がある。県や市の事業として図書館の設立が企図される際に、その地域の旧藩主家からの寄贈図書が蔵書の中核となった事例は多いが、明治10年代に設立された公立書籍館や20年代以降の地方教育会による図書館が、新知識の摂取や直接的に教育活動に資することを意図するあまり旧時代の文化との断絶を生じる傾向があったのに対し、旧藩領域をサービス対象として設立された図書館においては、藩校蔵書など旧藩の文化遺産が継承されることが多く、そこに新旧文化の融合が生じたとされている¹。しかし、近代公共図書館の制度と思想を受け入れる底流としては、旧藩蔵書の継承だけにとどまらず、それらを含んだ旧藩の教育政策やその延長上にある明治期以降の旧藩主家による旧藩領に対する支援事業等をも想定すべきであり、そのような政策の継続と進展の背景には、幕末から明治への時代の転換に適応した旧藩士民の「時務」の意識、すなわち、変わりゆく時勢のなかで生き抜いていくために必要な事物についての価値判断が作用していると考えられる²。

総じてみれば、このような現象は、廃藩置県という政治体制の大きな変化がわが国の近代図書館の成立過程に与えた影響の諸相が、個々の事例に表れたものとみることができる。そこで本稿では、幕末維新期に豊前中津に設立された洋学校である中津市学校の初代校長、小幡篤次郎の遺志により、その遺産を受継いでつくられたといわれる中津図書館（財団法人小幡記念図書館、現中津市立小幡記念図書館）の事例を中心として、同時期に旧藩関係者によって設立された図書館である県社神社三百年祭記念高田図書館（現上越市立高田図書館）、市立福井図書館（現福井市立図書館）の事例を参照することにより、このことを確認する。

これらの図書館については、現在に至るそれぞれの由来を記録した文書等は残ってい

るが、その歴史的位置づけについて考察した論考などは見うけられない。また、中津図書館については、関係の深い中津市学校や小幡篤次郎についての研究は数多くあるものの、中津図書館そのものについての論考は管見のかぎり存在しない。

明治末期のほぼ同時期に、同じく旧藩関係者によって設立された図書館の事例を比較し共通点を探ることにより、図書館の成立に対する影響の諸相を明らかにする。

1 中津図書館成立の要因

現在の中津市立小幡記念図書館の前身といえる図書館については、従来、福沢諭吉門下の中津藩士で中津市学校の初代校長³であった小幡篤次郎（1842-1905）が、臨終に際し「在中津の予が誕生地（三百四拾坪）は今猶予か所有に属するを以て此地所と外に予の蔵書を折半して半は慶應義塾に留め半は之を寄附すへければ郷党の青年子弟の為め又社会教育の為に中津に一図書館を建設する」⁴としてその蔵書と所有地を提供したことをうけ、1909（明治42）年に「中津図書館」として設立されたといわれている。

その際の設立委員は、旧藩主家当主奥平昌恭を含む東京と中津の慶應義塾及び旧中津藩関係者であったが⁵、図書館開館時の蔵書については「先生寄贈の書籍と旧中津藩賛進脩館蔵書の郡役所に保管しありたるものを収容」⁶して構成されている。このことからすれば、当初から図書館設立の目的には、小幡の蔵書の保存・公開だけでなく藩校進脩館の蔵書の継承の意図も含まれていたと考えられるが、2003年にまとめられた『中津市立小幡記念図書館所蔵和書目録』をみると、中津図書館以来受継がれた和書（和本）として「中津市学校蔵書」という蔵書印の押印分が248点、「奥平氏学問所」押印分が131点、「進脩館蔵書」押印分が131点、「小幡蔵書」押印分が49点、明治20年以前の刊本が180点、明治20年以後の刊本が115点の合計854点があげられている⁷。

これが中津図書館の蔵書の原形を伝えているとすれば、中津市学校の蔵書（和書）が29%、藩校進脩館の蔵書と旧藩主奥平家の学問所の蔵書がそれぞれ15%ということになり、小幡篤次郎の旧蔵書は6%ということになる。これらの和書以外に中津市学校旧蔵の洋書（「中津市学校蔵書」印あり）も引継がれているところからすれば⁸、1909（明治42）年の中津図書館設立の目的としては、藩校の旧蔵書とともに中津市学校の旧蔵書の継承も加えることができるであろう。

すなわち、1909（明治42）年の中津図書館成立の要因としては、①小幡篤次郎の意向、②旧藩・藩校蔵書の保存と継承、③旧中津市学校蔵書の保存と継承の三要素が想定される。

2 中津市学校の後継としての図書館

中津市学校とは、中津藩最後の藩主となった奥平昌邁の命により、福沢諭吉、小幡篤次郎、浜野定四郎、松山棟庵らが中心となって1871（明治4）年11月に中津城下に設立

された洋学校である。幕末維新期、各藩では教育の近代化や新時代に即応した人材養成をめざした学校改革が進められたが、その一つの方法が洋学校の設立や藩校の洋学部門の新設であった⁹。中津市学校は、当時まだ若年（16歳）であり慶応義塾にも学んだ奥平昌邁が、福沢の提言によって旧領地に対する支援事業として設立したもので、他の多くの洋学校が外国人教師の確保ができないまま1877（明治10）年以前に廃校となるなか、慶応義塾から派遣された教職員による「純国産」の洋学校として、1883（明治16）年まで存続した。

その中津市学校の初代校長として中津に赴任した小幡篤次郎は、福沢諭吉・門野幾之進とともに「義塾三尊」¹⁰と称された草創期の慶応義塾の中心的存在のひとりであり、まだ慶応義塾と改称する前の「福沢の家塾」¹¹で1866（慶応2）年から1868（明治元）年まで塾頭を務め、その後1890（明治23）年の慶応義塾大学部の開設にあたって塾長となり、福沢没後は慶應義塾の社頭も務めた人物である。

この時期の洋学校が結局廃校になってしまう要因として木村政伸は、洋学校に対する旧藩士の意識の低さをあげている。正統な藩校が藩士の精神的拠り所となっていたのに対し、洋学校は医学・兵学中心の実用的な位置づけをされていたために、藩校の維持存続に比べて洋学校の維持に対する熱意は薄いものにならざるを得なかった¹²。

中津市学校についても「関西第一ノ英学校」¹³と称され隆盛であった1876（明治9）年頃をピークとして生徒数が減少しているが、「明治八九年ノ交ニ到リテ各地方ノ学事略創業ノ途ニ就キ中小ノ学校漸次ニ設置セラレタルト同十年兵乱の余響等ニヨリ本校ノ学運次第ニ衰兆ヲ呈シ」¹⁴とあるように、その原因は公立学校が充実してきたことと西南戦争の勃発にあったようである。当時中津を管轄していた小倉県は、1872（明治5）年公布の学制に基づき「旧中津藩以来ノ和漢学校」¹⁵であった中津皇学校と旧藩校進脩館を合併して第三十六番中学校（通称片端中学校）とした。この片端中学校については、翌1873（明治6）年1月に英語専修科を開設したものの二年後の1875（明治8）年11月にこれを廃止、新たに設けた小学師範科が大分師範学校に合併されるなどの変遷がありつつも、1878（明治11）年2月に「中津中学校」として再編され、その後も維持継続されている。当時の新聞はその頃の事情を以下のように伝えている。

中津市学校は明治四年の創始に係るが当時は廃藩置県の際にて旧藩の学校僅かに存すれども単に漢学の一方のみ…先づ一校を設けて原書と訳書の両科とし以て開明の媒介となし別に付属小学校を置いて児童就学の階梯に供し専ら教育の模範学舎の標準となりて子弟を化育し来り。漸次改革して今日に至りし処最早官衙の世話も届き人民の方向も定まり町村に公立の小学も立ち往々中学の設置も始まり既に予定の目的を達した¹⁶

流行の洋学を教える中津市学校と旧藩校の流れをくむ中学校とが並立するなかで、公的な学校体系からはみ出た中津市学校の魅力が相対的に減じた結果であるが、加えて西南戦争による社会の混乱で、士族層の学問、特に洋学に対する熱意が冷めてしまったことも大きな原因であった。

中津の旧藩士にとって中津市学校は、結局、自分たちのための学校であるという意識を持つ対象ではなく、彼らの旧藩意識の支柱にはなり得なかった¹⁷といえるだろう。その挽回のために中津市学校では、1880（明治13）年頃から士族授産のための「テクニカルデパルテメント」を設けて木挽、指物、鍛冶屋などの職業訓練を行い¹⁸、養蚕専門校としての転換¹⁹が図られるが、その後の衰退は免れなかった。

また、中津市学校が閉校せざるを得なくなった原因は運営資金の不足にもあったようである。1883（明治16）年2月に旧藩主奥平昌邁名で出された「中津市学校閉校処分書」には「暫ク資金ヲ移シテ桑田ヲ開キ、三四年ヲ経テ桑樹繁茂セハ時価ヲ以テ伐桑ヲ鬻キ、一ハ士族養蚕ノ業ヲ便ニシ、一ハ其収益ヲ以テ学校ヲ再興シテ子弟ノ教育ヲ奨励セハ、一挙兩得ノ計ナラン歟」²⁰とあり、学校を一時的に閉校してその間の費用を桑の栽培にあて、それを換金して得た収益によって学校の運営資金を獲得する計画が語られている。

中津市学校は、1871（明治4）年の創立時には奥平家から家禄の五分の一、旧藩士が出資した財団（積立金による互助組織）である天保義社から毎年2万円の寄附を受けて、それを基礎財源として運営する計画であった。ところが1876（明治9）年の禄制改革によって奥平家からの援助が期待できなくなり、天保義社からの寄附も滞ったため、「僅に貳万円の資本にて千万歳も維持せんとするは到底行はるべきにあらず」²¹と福沢が嘆いたように、1878（明治11）年の時点で運営資金として2万円の現金しか残っていない状態となっていた。

そして遂に、1883（明治16）年3月の閉校を迎えることになるが、慶応義塾から出張してその閉校処分にあたったのは、ほかならぬ小幡篤次郎であった。このとき小幡は中津で以下のように演説している。

抑明治四年本校ヲ創立シタルノ趣意ハ地方官民ニ諸学校施設ノ表準ヲ示シ以テ未開ノ文運ヲ鼓舞誘導センカ為ナリ決シテ諸学校既立ノ後ニ至リテ漫ニ之ト競争ヲ試ルノ為ニアラサル也惟フニ今日我中津ニハ五小学及一中学アリテ就学ノ子弟ヲ待ツニ足り…吾市学校既ニ其必要ヲ見ス寧ロ無益ニ属スルカ如シ仍テ今ヤ断然之ヲ廃スル所以ナリ然ト雖…斯ノ如クニシテ数年ヲ経過セハ天下ノ文運其方針ヲ一転シ洋学再興英語流行ノ時運トナルヤ必セリ此時ニ至リ復本校ヲ再興セハ誠ニ可ナラスヤ²²

必ずまた「洋学再興英語流行」の時節が来ることを信じていた小幡は、閉校後も福沢諭吉とともに中津市学校の再興を模索していたようである。閉校三年後の1886（明治19）

年6月19日には、中津市学校に学んだ旧藩士である山田小太郎・新城関衛が、中津の士族団体である開運社に対して「市学校再興請願書」を提出しており、それを受けて翌7月、開運社は奥平家に「市学校再興ノ件」を要請しているが²³、このことについては福沢と小幡は事前に承知しており、山田ら発議者に対して助言も与えていた。

前年の1885（明治18）年8月15日付山口広江宛書簡で福沢は「市校再興の事情、いさ承知仕候。再興は甚だ望ましき事なり。昨今小幡氏箱根へ参り、四、五日中ニテ帰宅可候、其上ニテ話合、再興発議者へも返答可致奉存候」²⁴と述べており、さらに「内地雑居も近きニ在りと申事なれば、世ハ全く英語之時代ニ変する事ならん。何れ此辺之義ニ付、協議可致。中津之人も真実教育を大切と思ふならば、金之工夫可然…何卒外ニ金策致度」²⁵としているが、この時期には先の「閉校処分書」にある桑の栽培や養蚕などの「金之工夫」の見通しがまだ立っていなかったのかもしれない。

1894（明治27）年に締結された日英通商航海条約の発効を「内地雑居」の開始とすれば、この当時は諸外国との条約改正に伴う外国人の「内地雑居」の是非についての議論が高まっていた頃であり、小幡のいう「洋学再興英語流行ノ時運」への期待とともに、なんとかして一時的な閉校措置で収めて、中津市学校を存続させたいという意向があったものと思われる。

ところで、慶応義塾にはこの中津市学校のほかにも教職員を派遣して運営に参画した分校や関連校が複数存在したことが知られており、また福沢諭吉自身も、学制公布の1872（明治5）年前後の時期に『学問のすゝめ』の刊行だけでなく大分県や京都府など地方の教育行政と深く関わりをもっていたことが明らかになっている²⁶。このうち、1874（明治7）年2月に開校し同年9月に廃校となった京都慶応義塾については、当時の京都府参事で近代都市としての京都の整備計画「京都府施政ノ大綱領」を実現しつつあった横村正直と福沢との親交のなかで、先進的な教育政策の一環として設立されたものであるが、この京都府の教育政策が後の中津図書館の成立に影響を与えたといえるかもしれない。

福沢が門下生の早矢仕有的とともに実際に京都の番組小学校を視察して『京都学校の記』を起草したのは、1872（明治5）年5月のことであり、このときの福沢の京都滞在は、同年4月に横浜を汽船で発ち、途中神戸に上陸して陸路になり、最終的に中津に至って、6・7月に中津市学校を視察して帰京する旅程の一部であったことがわかっている²⁷。帰途にある同年7月12日に書かれた横村あての書簡で福沢は、

私中津滞留中大分県参事森下氏より書状さし越、同県学校の義に付相談いたし…其法は全く京師学校の規則に依り、唯皇漢の書籍を全く廃したるのみ…何れ当八、九月頃より開校の積り、就ては片仮名の国史略其御学校にて彫刻相成候はゞ、大分県え御廻し相成候様仕度、尚本県より可申上奉存候²⁸

と、京都府に倣って大分県の学校制度を整備する計画である旨を述べ、京都で制作した教科書を大分にも廻してくれるよう依頼しているが、このようなことを福沢が横村に依頼する背景には、当時の京都府の教育政策のなかに、番組小学校や中学校、外国語学校などの諸学校の整備に加えて、そこで使用される和・漢・洋の膨大な量の教科書類を準備・手配することも含まれていたことがある。

仏典・仏書などをおもに扱ってきた旧来の京都の書林にとって、教科書などの書籍を出版して学校に提供することは、新たな販路を開拓することになり、文明開化の時代にふさわしい近代的書籍商へと脱皮する絶好の機会となったが、書籍が高価だったこの当時、全ての児童・生徒が教科ごとの同一テキストを個人で購入することは不可能であったので、一定数の同一書籍を備えておいて、それを一定の利用料金（例えば定価の50分の1の月額など）で生徒たちに貸与するシステムが必要であった²⁹。

1870（明治3）年に慶応義塾に入学した学生の日記に「入学の翌日地理の原書一部を借りて素読に出席し…その月の晦日に地理書借用代を二匁、銭に直して三百五十文を塾に納めた」³⁰とあるように、当時の慶応義塾には「書籍出納ノ規則」の規程があり、塾生に対する書籍の貸借が行われていた。この貸出用の蔵書が後の学校図書館の原形の一部となっていくのだが、同時期の京都府の洋学校である欧学舎の「欧学舎規則」にも、英語の辞書や原書などの貸与規定が定められていた³¹。しかし、学校数や生徒数の多かった当時の京都府では、テキストなどの学校用図書の出版・販売を手掛けていた書籍商が、やがて学校の代わりに書籍を貸借する貸本業務も請け負うようになり、それが「書籍会社」さらに「集書会社」となって、後に京都府が設立した集書院（明治6年5月開業）の運営を受託することにつながっている³²。

注目したいのは、このような京都府の動向に対して、福沢諭吉が積極的に賛同し協力していることである。京都府立図書館の沿革を記した『京都府立京都図書館一覧』に以下のような記事がある。

学問の普及人智の啓発は図書観覧の便を得せしむるを第一とするを以て明治五年の初め公共図書館開設の府議あり此時先覚者福沢諭吉京都に普通教育学校の開設せられしと聞き来りて其実況を観察し大に之を称賛せり此際に於て書籍縦覧結社開設の急要なるを懲憑せりといふ於是御用書林村上勘兵衛書籍会社大黒屋太郎右衛門鷹司家従三国幽眠滋賀県士族梅辻平格連署して相共に公共図書縦覧所を開設せんことを府庁に願出でたり³³

多田建次は、村上勘兵衛や大黒屋ら書籍商が1872（明治5）年に設立した集書会社の設立の趣旨と利用方法を公表した文書である「集書会社基本」について、これは実は福沢諭吉が執筆したものではないかと推定しているが³⁴、『西洋事情』（1866年刊）によっ

て初めてヨーロッパの「ビブリオテーキ」を紹介し、「学問の普及人智の啓発」のため、学校とともに「書籍縦覧結社」を開設することの必要性を説いていた福沢にとって、先進的な京都府の教育政策の一環としての集書会社や集書院の設立は、全国の模範となる事例と認識されていたと思われる。そして、このときの福沢の京都視察（明治5年5月）が、その半年前に開校した中津市学校に赴くための旅程の途中に行われたものであることからすれば、福沢にとっては、慶應義塾やその分校といえる中津市学校、京都慶應義塾などの設立・運営と、番組小学校や集書院など京都府の先進的な教育政策、それに倣った大分県の学校制度の整備などの諸事業は、官民を問わず国を挙げて最優先で推進すべき、同時代の一大ムーブメントであったといえるだろう。

そのような福沢の活躍を同志として側で支え、共に全国を奔走してきた小幡篤次郎が、中津市学校の再興を果たせないまま晩年を迎えたとき、自身の蔵書を含めそこで使われた蔵書を残すために、学校ではなく図書館を設けることを企図したことは、福沢の遺志を継いだ処置であったと思われる。

小幡だけでなく他の慶應義塾関係者にとっても、中津図書館の設立は、中津市学校という学校がかつて存在したことを後代に示す意味があったのではないだろうか。

3 藩校蔵書の継承のための図書館

1909（明治42）年の開館時には「旧中津藩饗進脩館蔵書の郡役所に保管しありたるものを収容」³⁵したと伝えられ、後の蔵書目録にも「進脩館蔵書」や「奥平氏学問所」という蔵書印のあるものが多く含まれているところからすれば³⁶、旧中津藩関係者にとっては、中津図書館設立時の目的のなかに藩校蔵書や旧藩蔵書の保存と継承の意図が含まれていたことは疑いのないところである。

1871（明治4）年の廃藩置県により藩校が廃止されるとともに、その蔵書の散逸がはじまることは全国でみられる現象であるが、旧藩士・藩主家のほか、後に設立された役所や学校などに分散して保管されることもよく行われていたようである。その散逸を防ぎ、読書による学びを継続するため、旧藩主家や藩士によって図書館などの読書施設が設立される事例³⁷もあることからすれば、中津図書館についても、旧藩士のこのような「時務」（時勢に応じる）意識によって設立されたという側面もあると考えられる。とするならば、中津藩においては、新時代の人材育成のために設けられた中津市学校の旧蔵書も、藩校旧蔵書と同様に図書館の蔵書として継承していく必要があったということになるが、中津市学校は、藩主の命により単独で設けられた洋学校であり、藩校進脩館とのつながりが薄く、慶應義塾の分校としての意義が大きかったため、結局、士族層の精神的支柱となり得ず、その葛藤が中津図書館の蔵書内容にも反映しているといえる。

中津図書館（明治42年開館）と同時期に、旧藩主家や藩士によって設立された図書館の事例としては、新潟県の県社神社三百年祭記念高田図書館（現上越市立高田図書館）

と福井県の市立福井図書館（現福井市立図書館）がある。このうち、1908（明治41）年6月に開館した県社榊神社三百年祭記念高田図書館（以下「高田図書館」と略す）は、館名の示すとおり、旧高田藩（榊原家）の藩祖榊原康政を祀った榊神社の三百年祭（榊原康政没後三百年、明治38年）の記念事業のひとつとして、旧高田藩士によって設立された私立の図書館である³⁸。

士族総代会が組織した三百年祭典協会の「旨趣書」に「大方ノ賛助ヲ仰キ社殿ヲ修理シ資金ヲ積ミ又紀念ノ為メ図書館ノ端緒ヲ開キ公衆ニ便シ上越ノ品位ヲ高メ社会ノ進運ヲ裨益シ以テ神靈ヲ慰メントス」³⁹とあり、さらに1907（明治40）年12月に図書館設立の発起者連名で榊神社あてに出された図書館「継承約定書」の「書籍引移条件」⁴⁰には、

本館ノ図書ハ元高田藩脩道館ノ遺書ニシテ当高城村現住士族共有ノ処明治卅六年士族総代会ニ於テ榊神社三百年祭ノ紀念ニ建設セントスル図書館ヘ引移ヲ決議セリ今回議決議ニ基キ図書館ト共ニ書籍五百八十八部ヲ貴社付属物ニ引移ス貴神社ハ専ラ条件ヲ確認シ永久保存セラルヘシ

- 一 書籍ハ如何ナル場合ニ於テモ売却有之間敷候
- 二 時勢ノ変遷ニ依リ閉館ノ場合ハ書籍ハ勿論図書館一切直チニ貴神社ノ所有ニセラルヘシ
- 三 本館将来郡立県立等ニ転スルコトアルモ必ス前条ノ趣旨ヲ条件付セラルヘシ

とあるところからしても、旧高田藩士の団体（榊神社士族総代会）が、それまで士族の共有財産として大切に保管してきた旧藩校修道館の蔵書を次代に継承することを第一の目的とし、そのことによって「社会ノ進運ニ裨益」するために高田図書館を設立したことがわかるが、注目されるのは、この図書館が当初から榊神社の付属施設として神社の境内に建てられていることである。

榊神社とは、その由来記に「明治四年廃藩旧主帰京藩祖康政公祭祀之奠自然廃絶遂ニ忘恩ニ至ラン事ヲ憂ヒ…旧主榊原家ノ許ヲ受ケ公カ着用ノ鎧ヲ請ウテ之ヲ神靈ノ代表トシ明治九年一月県ノ許可ヲ得」⁴¹とあるように、廃藩置県直後、旧高田藩士で藩校修道館監察であった庄田直道が、藩祖榊原康政を祭神として奉祭する神社の設立を発起し、これが旧藩士に支持されて「榊神社」として設立の認可をうけたもので⁴²、1876（明治9）年に城外旧御対面所跡に社殿を建立、1906（明治39）年に県社となっている。主唱者であった庄田直道が後に士族授産のための第百三十九国立銀行の創設にも関わっていることにもあらわれているように、榊神社そのものが廃藩置県で疲弊した士族層（旧高田藩士）の精神的支柱となるべく創建されたものであるといえる。

1905（明治38）年に執行の予定であった榊神社三百年祭は日露戦争の勃発によって延期され、その翌年（明治39年）には県社への昇格運動が起こって舞楽殿や社務所の増改

築が行われているが⁴³、図書館については、当初は藩校の旧蔵書（約7,800冊）を神社の社務所で保管・公開する程度の計画であった。それが、日露戦後の1907（明治40）年5月に三百年祭が行われた後、偶々不要になっていた町村組合立高等小学校の校舎の建物の一部（南側一棟と敷地）を三百年祭典協会が購入し、これに玄関を設けて本館とするとともに書庫を新設して、本格的な図書館施設を整えることとなった。当時の内務省神社局からの通知に「神社ニシテ図書館ヲ経営スルハ穩当ヲ欠クノ嫌アルヲ以テ抵触ノ条項ヲ訂正スルカ将タ図書ヲ挙テ神社ニ納メシヲ神社ノ文庫トシテ便宜縦覧セシムルハ妨ケナシ」という一文があり⁴⁴、これに従って、図書とともに図書館の施設すべてを榊神社に引渡したのが1907（明治40）年12月、ようやく開館できたのが翌41年6月であった。図書館整備の進捗状況を伝えた当時の新聞記事に、

社殿側の土蔵を現在の儘か或は境内便宜の箇所に移転しめたる上これに縦覧所を附設して相当の設備をなすに止め書籍は旧藩修道館の用書の現に全土蔵に納めつつあるもの、外に多少の書籍を集めて公衆の縦覧に供し斯くして先ず図書館の端緒を開き漸を追ふて完備を期する見込⁴⁵

とあるところをみれば、高田図書館においては、この時点で藩校蔵書の保存と継承のためだけではなく一般公衆に公開するという近代公共図書館の概念が共有されていたことがわかる。

高田藩の藩校修道館とは、14代藩主榊原政敬によって1866（慶応2）年11月に設立されたもので、開校時の校舎は城外の対面所（後の榊神社所在地）にあった。1869（明治2）年には版籍奉還に伴う藩政改革の一環として学校総裁、副総裁、大監察、監察、教官、助教、日講、典籍などの職を設けるとともに校舎を移転・増設し、一時は「藩士ヲ挙テ兵隊ニ編成シ午前ハ演武所ニ於テ銃隊ヲ操練修業シ午後ハ修道館ニ登リ忠孝ノ教ヲ受ケシム」、「亦幼童ノ為メニハ修道館中ニ於テ習字読書算術等卑近学科ヲ授ク」⁴⁶のように盛んであったが、明治4年「廃藩ノ令ト共ニ悉ク廃止」されてしまう。1872（明治5）年の学制により校舎・資産を小学校と洋学校に譲渡、1874（明治7）年5月には新潟学校第四分校と改称して、現在の上越市立大手町小学校、新潟県立高田高等学校に引き継がれている⁴⁷。

この修道館の文庫（旧蔵書）の成立事情について高木靖文は、高田藩では藩校文庫が御書物役の管理した蔵書のかなりの部分を引き継いでおり、藩校文庫を藩主の蔵書で充当して発足させたと考えられるとしているが⁴⁸、『日本教育史資料』に「豊臣秀吉小田原ヲ征ス康政ニ賜ハルニ金沢文庫ノ書籍ヲ以テシ又加藤清正朝鮮ヨリ帰陣シ康政ニ贈ルニ彼ノ国ニ得ル所ノ五倫書ヲ以テ共ニ伝ヘテ旧藩ニ存ス」⁴⁹とあるように、榊原家には藩祖榊原康政以来の由緒ある典籍が保存・伝承されていたものと考えられる。そして、これ

らの典籍が後に高田図書館の蔵書となっていたことが、高田図書館の開館式（明治41年6月）についての新聞記事で報じられている⁵⁰。

藩校の存続期間が短かったことに加え、蔵書に藩祖伝来の貴重な典籍が含まれていたことが藩校文庫の後継としての図書館の存在意義を高めたといえ、高田図書館は旧高田藩士の精神的支柱にもなっていたと思われる。長州出兵も経験した最後の藩主政敬の強烈な危機感や時務意識によって設けられた藩校であったからこそ、その旧蔵書は末永く高田の地で受継いでいかなければならないという士族層の思いが強くなったのではないだろうか。1909（明治42）年12月現在の高田図書館の蔵書は、藩校修道館旧蔵書が7,826冊（588部）、購入書が66冊（37部）、寄贈書が2,229冊（655部）、総計で20,122冊（1,278部）となっており、その後1911（明治44）年には高田町に経営を移管して高田町立高田図書館となっている。藩校の旧蔵書を中核として、その後近代図書館へと発展していったことがわかる。

一方、1909（明治42）年4月に開館した「市立福井図書館」（以下「福井図書館」）についても、その設立の契機となったのは藩祖の三百年祭であった。

福井市図書館寄附願⁵¹

昨四十年五月二十五日を以て、藩祖秀康公三百年祭為記念、福井市へ図書館一棟并文庫一棟建設の上寄附可致旨御報申置候処、今回落成候に付即ち図書館一棟、附属廊下、便所、石門、井戸等の諸費用金四千〇四十二圓二十五錢九厘、別紙申号明細書之通、松平家に於て仕払致し、又同館附属書庫一棟并廊下建設及器具等金一千五百二十三圓は、別紙乙号明細帳之通、本市有志本派本願寺福井別院輪番外八十五人の諸氏寄附金を以て仕払候に付、別冊明細書相添へ及御引渡候間、御検査之上御引受相成度、尤も本館等の敷地は、別紙図面之通二百八十九坪六合四勺は無税にて御用達申候、御承知有之度、且亦建物模様替或は建物を目的外に御使用之際は、前以て寄附者承諾の上御取計有之度、此段御照会候間御確報煩度候也。

侯爵松平康莊家令 鈴木準道

明治四十一年三月二十四日

福井市長 山品捨録殿

1907（明治40）年6月2日は、福井藩の藩祖松平秀康の三百年祭にあたっており、その記念事業として旧藩主松平家が図書館の設立を計画・起工、翌（明治41）年3月の建物の竣工と同時に福井市に寄附されたもので、その蔵書は「従来から市が保有してきたもの、松平家や市内蔵書家から委託を受けたもの合わせて二万五七九〇冊を有し、新聞や雑誌も備えられていた」⁵²とあるように、開館にあわせて整備したものであることがわかる。

この「図書館寄附願」には藩校やその蔵書の継承については特に記されていないが、福井藩の藩校明道館とは、1855（安政2）年1月に16代藩主松平慶永（春嶽）が福井城内三の丸に設けたものである。1857（安政4）年1月に橋本左内が明道館の御用掛り（学監同様）を拝命したという記録も残っており⁵³、その翌年に熊本から赴任した横井小楠もこの藩校で講義を行っている。

その後、1863（文久3）年に城外（元鷹冷場）に移転するものの、1869（明治2）年5月には城内本丸に戻り、名称も「明新館」と変更して再出発している。この明新館は、藩のお雇い外国人で後には大学南校でも教えたウィリアム・グリフィス（William Elliot Griffis）が物理・化学を教えていたことにもあらわれているように、福井藩の時務意識により、新時代に即応するために洋学部門を新設された藩校であり、廃藩置県（明治4年）後は私立福井中学（明治6年）、福井明新中学校（明治7年）、福井県福井中学校（明治15年）と改称して存続し、1889（明治22）年には中学校令下の福井県尋常中学校となっている。

「明新館」という扁額が現在も残っているが、これが当時（明治2年）の当主松平茂昭ではなく、明道館創設者の松平慶永によって揮毫されていることから、福井藩においては、この明新館が旧藩士の精神的支柱となった存在であり、藩校教育が明治期以後も継続していたことがわかる⁵⁴。1871（明治4）年の廃藩置県により福井藩は解体され、その藩政資料と藩校（明道館・明新館）旧蔵書の一部は松平家に引き継がれたが、藩校旧蔵書の大部分は、1876（明治9）年の福井城解体までは城内本丸の私立福井中学（明新中学校）にあり、その後旧制福井中学校（福井県尋常中学校）に引き継がれた。旧制福井中学校が受け継いだ藩校旧蔵書は、1948（昭和23）年の福井地震とそれに伴う水害によってほとんどが失われたが、松平家が受け継いだ藩政資料・藩校旧蔵書は一部に被害を受けつつも現在まで伝わっており、福井図書館には、図書館開館時（明治42年）の松平家当主松平康莊から、藩主お手元の図書や藩校旧蔵書の一部が寄贈されている⁵⁵。

4 旧藩主家の支援事業としての図書館：福沢諭吉の華族論の影響

先にあげた「図書館寄附願」からもわかるように、この福井図書館の設立には、旧藩主松平家の旧藩領（福井市）に対する支援事業としての側面がある。このことは、鍋島家による佐賀図書館設立の事例や⁵⁶、中津市学校とともに奥平家が資金等を提供した中津図書館とも共通しているといえるが、福井図書館と中津図書館との共通点を探すならば、その成立の背景に旧藩主家（大名華族）の子弟教育における福沢諭吉の華族論（華族帰郷論・地域開発論）の影響がみられるところにある。

小川原正道によれば、福沢諭吉は近代国家の建設過程における士族や華族の役割を強く認識しており、華族についてはその資産が贅沢な生活や交際によって蕩尽してしまうことを恐れつつ、その財産や歴史的な名望を生かして学問や地域産業の発展に貢献すべき

だと主張し続けていた⁵⁷。

1877（明治10）年に書かれた「旧藩情」緒言で福沢は、「華族が様々の仕組を設けて様々の事に財を費し、様々の憂を憂て様々の奇策妙計を運らさんよりも、寧ろ其財の未だ空しく消散せざるに当て、早く銘々の旧藩地に学校を立てなば、数年の後は間接の功を奏して、華族の私の為にも藩地の公共の為にも大なる利益ある可し」⁵⁸と述べているが、大名華族に対しては、学校建設とともに旧領地の模範として学問に取り組むことも求めており⁵⁹、学習院が発足する明治10年ごろまでに、慶應義塾には中津藩の奥平昌邁のほかにも60名あまりの華族（旧藩主家の子弟）が入社して、福沢と深い関係を築いた旧藩主家も少なくなかった⁶⁰。その中に、福井図書館設立時の松平家当主（第18代）の松平康荘がいる。

1867（慶応3）年2月生まれの松平康荘は、廃藩置県後福井から東京府日本橋に移住し、満9歳まで官立小学校と私塾で教育を受けた後、1877（明治10）年に慶應義塾（幼年局和田義郎方）に入学している⁶¹。家督相続人としての康荘の教育は祖父の慶永主導で進められており、慶永はしばしば福沢に子弟教育についての意見を仰いで、その助言を忠実に実行したといわれているが⁶²、なかなか進展しない康荘の教育の問題点を福沢は、旧大名家の伝統である「御殿風」にあると見抜いていた⁶³。

1879（明治12）年に福沢は「華族を武辺に導くの説」と題する建白書（同時に『郵便報知新聞』5月14日付社説として掲載）を提出し、そのなかで「華族は平生の生活豊なるに過ぎ、之がために却て身心の活発力に乏しくして、尋常の学生と鋒を争ふこと能はざる者多きに於てをや…兵の急なる国の為を謀て該族固有の名望を利用せん」⁶⁴として、成績の振るわない大名華族の子弟はその名望を活かして軍事に投資し自らも軍人になるべきだと説いているが、松平康荘も慶應義塾退塾後の1884（明治17）年2月、兵学修業のためとしてドイツに渡っている。しかし、1886（明治19）年12月末にはドイツでの陸軍士官学校入学を断念し、イギリスに転居する。イギリスでは、祖父の慶永や旧臣の意向に沿ってケンブリッジ大学入学を目指して勉学に励んだが、ある時期から康荘自身の意向により一転して農学修業を望み⁶⁵、1889（明治22）年5月に、サイレンセスター王立農学校（Royal Agricultural College, Cirencester）に入学している。

熊澤恵里子は、このとき農学校で「生涯の目的」を発見したことが康荘の自立への道であったとして「康荘の価値観は、少年期の慶應義塾幼年局ならびに実習を中心とした農学修行により養成されたと考えられる。九歳十一ヶ月からの約三年半を公私ともに福澤・和田に委ねられた康荘への「身心の教育」の影響は、その思想・行動の端々に見られる」⁶⁶としているが、祖父慶永・父茂昭の死去とそれに伴う家督相続による一時帰国を除き都合9年間にも及んだ留学の成果として、康荘は帰国直後の1893（明治26）年5月、旧福井城内に農学の研究・実践の場としての「松平試農場」を設ける。松平試農場は、松平家の個人資産と土地を利用して設立した民間の農事試験場の先駆であり、旧藩領の

産業発展・地域開発に貢献するための旧藩主家による支援事業であるが、それから約15年後の福井図書館の設立と福井市への寄附も、当時の松平家当主である康荘の意向である。

慶應義塾を経て外国に留学し、帰国後は旧藩領との絆を保ちつつ地域開発に貢献して、政治家や官僚等として活躍した大名華族の最初の事例は、福沢自身が旧藩士として後見人を務めた中津藩の奥平昌邁であるが、福井藩の松平康荘の場合も、外国留学することによって「御殿風」の環境を脱して「一身の独立」を果たし、旧藩領への支援や農学の振興を通じて「一国の独立」を図るという、その自立の過程で福沢諭吉の華族論の影響をうかがうことができる。

帰国後の松平康荘の活動に、華族に対しては産業の振興とともに学校の設立など教育・育英事業への出資を勧めていた福沢の地域開発論の影響があるとすれば、旧藩領に図書館を設けることも、学校に次ぐべき教育・育英事業の一環とみなされていたのではないだろうか。中津図書館の設立委員の筆頭であり、後に財団法人化した際の図書館長となった当時の奥平家当主奥平昌恭も、先代昌邁と同じく慶應義塾で福沢の影響を受けていたとすれば、旧藩主家による旧藩領に対する支援事業としての図書館設立事例の中には、学校の設立と同じく、福沢諭吉の華族論（華族帰郷論・地域開発論）の影響によるものがあると考えられる。

おわりに：明治40年代の支援事業と図書館

中津図書館、高田図書館、福井図書館の各図書館が成立した経緯については、以上の考察により確認されたが、この三館が開館した明治40年代初頭は、日露戦争（明治37年）の直後にあたり、図書館をめぐる社会的状況が大きく変化した時期でもある。このことが、明治末期以降の図書館の成立要因、すなわち、設立にかかわった旧藩関係者等の時務意識や旧藩主家による支援事業のありかたに、大きな影響を与えていると考えられる。

日清戦争後の明治30年前後から、いわゆる一等国意識や一等国国民の意識の高揚によって、それ以前に比べて「読書」に対する社会的関心が急激に高まったとされているが⁶⁷、これに加えて、1899（明治32）年の図書館令の公布を契機として図書館への関心も高まっていた。東京などの都市部に大規模な私立の図書館が続々とつくられたところに明治30年代の特徴があるが、それが40年代になると、いわゆる地方改良運動の推進により、内務省主導で図書館整備が推進されるようになり、全国的に図書館数が増加する。1890（明治23）年以来ほぼ横ばいであった図書館数が1910（明治43）年から1920（大正9）年までの間に約5倍の1640館になり、1930（昭和5）年には4000館を越える⁶⁸。

当時、特に都市部においては図書館の設立を要請する社会的な雰囲気があり、明治30年代後半からは福岡、横浜、長野、新潟など全国各地の主要都市において、いわば都市

の体面上からも図書館が必要であるというような趣旨の新聞記事がしばしばみられるようになる⁶⁹。このことは、一定以上の規模の都市には都市施設として図書館が必要であるという共通認識がこの時期に成立していたことをうかがわせる。1907（明治40）年6月の成田図書館書庫落成式において、「図書館は啻に文明開化の程度を測る所のメートルたるのみならず併せて地方民族の公益に関する事業のメートル」⁷⁰という祝辞がなされ、また、当時の新聞では「学校と図書館」として以下のような論説がなされている。

図書館は読書家をして啻に満足せしむるのみならず散佚の虞ある高価の書籍或は珍奇の書籍を保存するを得若し夫れ特志の士ありて自己の所有する有益の図書を寄附せんとするも既設の図書館なきに於ては之を為すを能はざるなり然るに世間の富豪学校の建設に資本を投じて吝まざるに拘らず図書館の設立に資を投ずるもの少なし…各地各種の学校に於て相当の図書館を備へざる限り学校の所在地には必ず図書館なかるべからざると同時に学校に在学し得ざる一般の人に適當なる図書館は最も必要なり近き将来に於て図書館は学校数以上を全国に有せざるを得ざる時機の来らんこと恊に明らかなる理なりと謂ふべし…世人が教会寺院等を維持し得るならば一市一二個の図書館を經營し又之を維持すること敢て難事にあらざるべし⁷¹

このような時期に中津図書館、高田図書館、福井図書館が設立されたことについては、本来は士族授産の目的をも含んでいた旧藩領に対する支援事業が、日露戦争後の地方改良運動に伴う全国的な民衆教化施設整備の流れに接続してしまった現象と考えることができるが、別の面からみれば、福沢の地域開発論の影響をうけた旧藩主家による教育・育英事業が、銀行や鉄道のような都市インフラとしての図書館設立ブームのなかで、地元の名士としてのフィランソロピー（社会貢献活動）という性質を帯びてしまった結果ととらえることもできる。

そしてこのことは、廃藩置県の時とは異なる、この時期ならではの「時務」であったといえるのではないだろうか。

福沢諭吉は『文明論之概略』のなかで、「廃藩置県の一挙も、華士族一般のためには極めて不便利にして、之を好まざるもの十に七、八」⁷²としているが、「旧藩情」などの地域開発論においても、また『時事新報』社説「旧藩主華族は其旧領地に帰住すべし」などの華族帰郷論においても、福沢が一貫して説いているのは廃藩置県という大きな変化に対して華族や士族がいかに適応すべきかという「時務」の具体的方法についてであった。

明治初期においては、維新の大変化のなかを生き抜こうとする士族層にとって、新設された洋学校も含む旧藩学校とその蔵書を継承し、新時代にも存続させておくことは、「時務」を実践する上でも、そのための精神的支柱としても必要なことであったに違いない。そのような思いを受け継いだからこそ、藩校修道館旧蔵書の継承を願った旧高田藩

の士族たちも、旧藩主家の当主として福井市に図書館を寄附した松平康莊も、そして「郷党の青年子弟の爲め又社会教育の爲めに中津に一図書館を建設する」⁷³として自身の遺産を提供した小幡篤次郎も、地元の発展を願って図書館の設立を企図したのである。このとき小幡が実際に「社会教育」⁷⁴という言葉を使ったとすれば、ここに当時の小幡の図書館に対する認識があらわれているといえるが、明治40年代の各人の時務意識のありかたは、廃藩置県当時のそれとは、かなり異なっていたであろう。

近代公共図書館の設立につながる社会的背景の一部として、旧藩組織の解体とこれに適応しようとする旧藩主・士族層の諸活動があったとするならば、このことが近現代の日本における図書館観に一定の影響を及ぼしていると考えられる。

〔注〕

1. 永末十四雄『日本公共図書館の形成』1984年：pp.74-75。
2. 伊東達也「県立図書館の成立過程における近世と近代の接続について：鍋島家による佐賀図書館の設立をめぐる」『教育基礎学研究』17号、2020年。
3. 「明治二十三年以前における慶應義塾出身教職員の分布状況」『慶應義塾百年史』（慶應義塾、1969年）付録。
4. 『小幡篤次郎先生小伝並小幡記念図書館沿革概要』小幡記念図書館、1926年。
5. 中津図書館の設立委員は、奥平昌恭、和田豊治、甲斐織衛、須田辰次郎、山口半七、中野松三郎、梅田才三郎の7名であったが、この全員が旧中津藩関係者であり、梅田才三郎以外は全て慶應義塾出身者である（三田商業研究会『慶應義塾出身名流列伝』実業の世界社、1909年）。
6. 前掲4。
7. 『中津市立小幡記念図書館所蔵和書目録』中津市立小幡記念図書館、2003年。
8. 中津南高等学校（旧中津中学校）が保管していた中津市学校旧蔵書（洋書）の中津市立小幡記念図書館への移管（管理委託）契約が1995（平成7）年に行われている。
9. 木村政伸「中津市学校にみる明治期洋学校の地域社会における歴史的役割」『日本教育史研究』9号、1990年：p.20。
10. 林毅陸「門野先生を憶ふ」『門野幾之進先生事蹟・文集』小泉信三ほか監修、門野幾之進先生懐旧録及論集刊行会、1939年：p.731。
11. 三宅雪嶺『同時代史』3巻、岩波書店、1950年：p.458。
12. 前掲9：p.20。
13. 広池千九郎『中津歴史』（1891年、防長史料出版社により1976年復刻）：p.307。
14. 山田小太郎「中津学事沿革一斑」『山田小太郎先生附録日誌類抄』學佛會、1940年：p.3。
15. 前掲14：p.2。
16. 『田舎新聞』272号（明治13年11月24日）、1880年。
17. 前掲9：p.40。
18. 明治十年六月四日付浜野定四郎宛福沢書簡（『福澤諭吉年鑑』4巻、福沢諭吉協会、1977年：pp.4-5）。
19. 市校事務委員集会録事一号（西澤直子「中津市学校に関する考察」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』16巻、1999年より引用）。
20. 中津市学校閉校処分分書（西澤直子「中津市学校に関する考察」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』16巻、1999年：pp.138-139より引用）。

21. 明治十二年三月二十五日島津万次郎宛書簡（『福沢諭吉全集』17巻：p.303）。
22. 前掲13：pp.309-310。
23. 前掲14：p.5。
24. 慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』2巻、岩波書店、2001年：p.294。
25. 前掲24：pp.294-295。
26. 多田建次『京都集書院：福沢諭吉と京都人脈』玉川大学出版部、1998年：pp.11-54。
27. 「福澤諭吉年譜」慶應義塾編『福沢諭吉全集』21巻、岩波書店、1971年：pp.485-790。
28. 福沢諭吉書簡：槇村正直宛明治五年七月十二日（前掲26：p.168より引用）。
29. 前掲26：pp.58-60。
30. 『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター、1972年：p.13。
31. 前掲26：pp.60-61。
32. 前掲26：pp.65-112。
33. 『京都府立京都図書館一覧』京都府立京都図書館、1910年：pp.3-4。
34. 前掲26：pp.147-163。
35. 前掲4。
36. 前掲7。
37. 伊東達也「旧藩の時務意識と図書館の成立：八戸市立図書館の由来をめぐって」『教育基礎学研究』19号、2022年：pp.21-34。
38. 『創立六十周年記念高田市立図書館小史』高田市立図書館、1969年：p.3。
39. 「旧高田藩祖三百年祭典協会旨趣書」1903年（上越市公文書センター所蔵）。
40. 「榊神社三百年祭記念高田図書館概要」1910年（上越市公文書センター所蔵）。
41. 『懸社榊神社之記』榊神社社務所、1907年（上越市立図書館所蔵）：pp.57-58。
42. 村山和夫『シリーズ藩物語高田藩』現代書館、2008年：p.204。
43. 前掲41。
44. 前掲40。
45. 「図書館設立」『高田新聞』明治39年4月13日。
46. 「旧高田藩学校」『日本教育史資料』二、文部省編、臨川書店、1970年：p.268。
47. 村山和夫「藩校「修道館」と私塾「文武済美堂」」『図説上越の歴史』郷土出版社、1998年：p.132。
48. 高木靖文「高田藩榊原家の蔵書と修道館文庫」『新潟大学教育学部紀要』29巻1号、1987年：pp.184-196。
49. 前掲46：p.267。
50. 「高田図書館開館式」『高田新聞』明治41年6月28日。
51. 『福井県教育百年史第三巻史料編（一）』福井県教育委員会、1975年：pp.1216-1217。
52. 『福井市史通史編3』福井市、2005年：p.293。
53. 「明道館用留抜書」『福井市史資料編9』福井市、1994年：p.113。
54. 『グリフィスが見た明治の福井』福井市立郷土歴史博物館、2021年：p.32。
55. 『旧市立図書館と近代福井のあゆみ』（企画展示解説シート）福井市立郷土資料博物館、2018年。
56. 伊東達也「県立図書館の成立過程における近世と近代の接続について：鍋島家による佐賀図書館の設立をめぐって」『教育基礎学研究』17号、2020年。
57. 小川原正道「福沢諭吉の地域開発論と華族：中津・延岡・福岡を例に」『九州史学』159号、九州史学研究会、2011年：p.4。
58. 福沢諭吉「旧藩情」慶應義塾編『福沢諭吉全集』7巻、岩波書店、1959年：p.264。
59. 慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』1巻、岩波書店、2001年：pp.156-161。
60. 前掲57：p.4。

61. 熊澤恵里子「大名華族の子弟教育：越前松平康荘の自立への道」『明治維新史研究』11号、2014年：p.18。
62. 熊澤恵里子「越前松平家の子弟教育と福沢諭吉」『福沢手帳』184号、福澤諭吉協会、2020年：pp.1-8。
63. 前掲62：p.5。
64. 慶應義塾編『福澤諭吉全集』20巻、岩波書店、1971年：pp.196-202。
65. 前掲61：pp.22-25。
66. 前掲61：p.25。
67. 永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生』日本エディタースクール出版部、2004年：p.200。
68. 石井敦編『図書館史近代日本篇：図書館学教育資料集成4』白石書店、1978年：p.166。
69. 「市設図書館の必要」横浜市は多くの点に於て図書館を要求するの地位にあり、其貿易港として市民が要求するの智識芸能の他の都市を超ゆること其一なり、来往集散する多数の旅客海員をして旅情を慰むるの具を与ふる其二なり、其他図書館によりて享有すべき特種の恩恵を挙げれば尚多々あり、而して仮りに必要の問題を離れて之を見るも市の威厳として一大図書館を有すべきの理由を存す、今や横浜市は世界の横浜として其膨張革進の途にあり焉んぞ一図書館を有せずして已むべけんや、素より其市設なると私人の賜なるとを問はじ、近くは大阪市が富豪住友家の図書館を有せんとする又東京市民が大橋図書館の恩恵に浴しつつある其効果は決して官設公設に劣らざるなり、然れども図書館の設備や其費用を要すること大、完全にして包容の大なるものを求めんには容易く之を一人に望むべからず〔『横浜新報』明治35年1月22日〕。
70. 長岡陸軍少将「図書館と文明の尺度」『毎日電報』明治40年6月12日。
71. 「学校と図書館」『神戸又新日報』明治40年4月18日。
72. 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫、1995年：p.110。
73. 前掲4。
74. 「社会教育」という語が一般的になったのは、明治20年代以降（山名次郎『社会教育論』金港堂、1892〔明治25〕年）と考えられる。